

## 平成15年度第3回 全学FD アンケートのまとめ

回収：84名分（回収率62.2%）  
（参加者135名：総長等を除く）

質問1. ご参加なさった分科会では、当該外国語の教育がかかえる問題点がどの程度、取り上げられたとお考えですか？

	英語科目 分科会	未修科目 分科会	日本語科目 分科会	合 計
ほぼ全部	13名	3名	3名	19名
ある程度	30名	15名	7名	52名
なんとも言えない	4名	0名	0名	4名
まだ残っている	1名	3名	0名	4名
ごく一部	2名	2名	0名	4名
未回答	0名	1名	0名	1名
合 計	50名	24名	10名	84名

質問2. ご参加なさった分科会のまとめ（全体会報告と質疑及び討論）に加えたいとお考えの問題、あるいは対応策や要望等がありましたらお書き下さい。

（質問1：「ほぼ全部」の回答者）

〔英語科目分科会〕

能力別クラス編成は今後、是非とも前向きに検討してほしい。 / 英語の個々の能力を高める授業があってもよいのでは。例えば、Readingのみ、Listeningのみを重点的に行う。 / 授業に欠席しがちな学生も含めて、教育上のケアが必要である。語学は受講者数が多いために、一人の学生に充てられる教員の指導やケアの量が不十分である。常に時間と体力の勝負です。 / 大学院でのNative Speakerの授業を加えて頂ければ、外国人のポスドクの人々の活用を考えるのが良いのではと考えます。

（例えば、非常勤講師として大学院生への英会話教育） / 分科会のまとめに加わったので省略 / 特にありません。 / 中・高校教育において、文科省より英語教育に関する新しい指導要領が出され、さらに入学してくる学生の英語レベルが低下することが、懸念されるが、それにどう対処していくのか？ / I recommend outsourcing for TOEFL two Semester TOEFL <500> goal with the TOEFL alc marathon. Students study three hours per week for 8 months <4月→7月><10→2月>

〔未修科目分科会〕

結論をまとめるための時間をふやしてほしい。

〔日本語科目分科会〕

国際性とアジアを重視する九州大学にとって留学生はいろんな意味で貴重かつ不可欠な存在です。日本語教育のみならず、日常の生活支援も含めて大学全体での取り組みが必要と思われます。 / 留学生に対する日本語教育としての①語学力（4技能）、②母国語から日本語へのマッピング（ボキャブラリ）力の育成、③母国での高度教育と日本の高校教育のギャップ解消、④（日本人にも本来必要な）技術者／研究者にとって、必要な日本語能力（テクニカルライティング等）の教育を一貫して教育する体制づくりが必要

（質問1：「ある程度」の回答者）

#### [英語科目分科会]

TOEFL の点数をどのように利用するかは、各学部、研究院の判断による方が良いと思われる。 / 従来型の学問としての英語（外国語）を学ばせることを中心に検討するのが重要と考える。TOEFL等の必要性はあると考えるが+αの部分で、九大全体として取り組んで行くべき問題である。基本的なことではあるが各々の授業に対して目標達成等をしっかり評価して、小さなところから改善すべきである。それを支援する九大全体の取り組みも必要である。 / 会の目的があまり明確ではないので、もっとはっきりさせた方がよいと思う。 / Nativeがどうのよりもbrokenでも自分の意見を英語で言えるようにカリキュラムを改善してほしい。 / 各学部で必要とされる英語教育は何かを明らかにし、カリキュラムの作成に反映させる。 / 評価基準を設定する必要がある。

/ 英語力の向上は賛成。授業でなんとかするという考え方よりも、広島の場合にあるように設備投資（ローリスクハイリターン）をすればどうか。TOEFLのような基準の導入賛成。 / 所属研究院で何が必要なのか、言文との関係が必要と感じました。 / 統一シラバス、テキストについて、教育の定型化、教授者例のマンネリ化、学生側のノート / コピーなどにつながるのではないかという心配がある。 / (1)半期又は1年ごとにTOEFL-ITPなどを全学生（学科の希望によるが）に受験させ、それに応じてクラス編成（能力別、かつ、ヒアリング／リーディング／ライティング／スピーキング重点別）をして、各レベルにあった教育をすれば良い。(2)さらに、九大卒業生の“品質保証”の点から、学生に卒業までに達成する必要があるTOEFL／TOEICの点数を目標／必修として設定することも重要である。(3)また、各クラスの学生のTOEFL／TOEIC達成点をもって、教官（英語）の評価を行うと教官側も必死に教えるようになるのではと考える。 / 特にありません。 / 低年次（1～2年）教育→高年次教育（3～4年）→大学院教育への継続性 / 訓練教育重視は好ましくない。 / お互いの立場をよく理解し合うことが必要。（全学と専攻の間で）。言文の中で、FDを行う必要がある。 / 言語学習を通じて、異文化理解や幅広い教養を身につけることが、基本方針の中にあげられているが、それは、成績評価にどう織り込まれるか。 / マンパワーや時間配分についての言文としての討議を。

#### [未修科目分科会]

学生のモチベーションを上げるには、社会（産業界）についての情報、専門課程の教官からのアドバイス、言語文化科目担当教官のモチベーションを重視した授業など全学的な取り組みが必要。 / 特にありませんが平準化にこだわらない。九大らしい語学教育、九大ならではの語学教育を実現していく必要がある。将来の独法化に向けてユニークさが求められるであろうと思われる。社会人向けの履修できる科目を増やす等・・・ / 外国語を新たに習得しようとするときの方法論を提示すべきではないかと意見を出しました。 / 分科会のまとめにもある様に、文法を始めとした基礎に力を入れて欲しい。未修の語学教育も重要であり、英語だけでは異文化の理解 / 交流は不十分である。 / 4年一貫教育における言語文化科目のあるべき姿 / 未修語学教育への留学生の活用

#### [日本語科目分科会]

学部の留学生については、多くの教官が身近な経験を持っていないので、具体的な話にならなかった。留学生に対する日本語教育がどのようになされているのか知る良い機会であった。 / 法人化後の構想として、営利的なコース運営ができるのだろうか。別件（大学教員の外）のように。全学や大学院での教育から通して見直しが必要となってきたり、ここ数年で随分変化すると思われる。そうした構想が問われることなしに、現在の状況に対する改善のみが考えられているように思われる。なぜ、英語1-6まであるのか？文理別や大学院別などの分科会もあってよかったのでは。多数決をとるためだろうか。教科書程度は見たかった。買ってもよいのだが。 / 留学生に対しては個別具体的な教育目標 / 課題が重要であることが指摘された。 / 全体会の質疑は、参加者が今回の企画をよく理解していなかったと思われる。 / 留学生入試の査定基準に関し、留学生センターと関係部局間で情報交換をもっとする必要がある。

(質問1：「なんとも言えない」の回答者)

[英語科目分科会]

特になし。

(質問1：「まだ残っている」の回答者)

[英語科目分科会]

学生が外国語を学ぶmotivationを持てる様々な工夫をすることが最も重要。言文の役割は言語教育のインフラと割り切るべきではなく、学生のキャリア / パスや専門分野との関係づけを考慮すべき。

[未修科目分科会]

第二外国語の意義付けがもう少し深く議論した方がよい。 / 専攻によっては、語学教育を別立てにする必要があるのではないか。例えば、ドイツ語、文学専攻生はそのための基礎語学があり、意欲のある学生はそれを一般語学に振替えることができるようなシステムの標準化もあり得る。 / 教官へのアンケートの評価の定量化が是非必要。(但し、試験評価の平準化が前提) →米のBest Teacher的な制度。(授業評価データ一覧の例えばドイツ語 I の評価の差を野放しにしているのが信じられない。)

(質問1：「ごく一部」の回答者)

[英語科目分科会]

英語の基本は文法であるということが強調されましたが、文法をいくらマスターしても話す、聞くが出来るようにならないということは明白です。英会話によるコミュニケーションが必要となっていく。これからの世代に英会話を重点的に教えるのは、大学の役目だと思います。 / 抑々何の為に開かれたFDだったのか、テーマが絞られていない為、散漫になった。当日配布された「言語文化科目 I のこれから」の2頁目最後の四つ枠の中の「参考」に掲げられた課題と先行して配付されたアンケート結果がうまくかみ合わず議論が展開しなかったのではないか。(全体会の最後でも申し上げました。) / 1. 共通教材, 共通進度, 統一試験, 統一評価, 能力別編成。2. 英語, 未修外国語教官増。3. 外国語科目を中心とする時間割設定を、1日の中に組み込む。理想は50分時間枠, 残りの講義科目は90分で良い。

(質問1：未回答者)

[英語科目分科会]

学生による授業評価の活用を考えるべきである。提案(仮に) 1)各設問に対して、最高の評価(あるいは高い評価)を得ている教師から話を聞く。2)相対的に低い評価の項目について、教官のシンポジウムを開く。3) 1), 2)などを柱とした言文教育FDを開いたらどうか。

質問3. 全体会で報告のあった、他の分科会のまとめは参考になりましたか？

	英語科目分科会	未修科目分科会	日本語科目分科会	合計
とても	11名	3名	0名	14名
いづらか	28名	13名	7名	48名
なんとも言えない	7名	5名	1名	13名
あまり	1名	2名	0名	3名
関係がなかった	0名	0名	0名	0名
未回答	3名	1名	2名	6名
合計	50名	24名	10名	84名

質問4. 今回の成果を具体化させるために、どのような対応や方策が有効だとお考えですか。

(言語文化研究院の対応)

[英語科目分科会]

Native speaker のカリキュラム改定作業段階からの実質的な協力(活用) / 外国言語を学ぶ目的は2つあると思う。一つは異文化を知ること、もう一つは外国人とのコミュニケーションであるが、まずは後者、次いで前者の順で重要であると考え。崇高な内容の講義はもちろん重要で大学にとって不可欠であるが、それ以前のPrimitiveな問題として外国人とコミュニケーションが取れる教育があるように思う。 / 1) Should carefully investigate outsourcing possibilities for students to study for TOEFL for first two semesters to enable all students to achieve a score of 500 by the end of the first year / 研究院では大学院生の論文書や学会presentationの際に英語がとても大切です。Native speakerとしてQuinnさんに一部指導をうけていますが他のspeakerにも協力してもらい、より多くの機会や違った意見がきけるようにしてほしい。 / 多様な意見が出たので、時間をかけた十分な吟味が必要。 / 早急に新しいカリキュラムを作成し、効率のよい授業形態と学生の語学力の向上を目指すことが必要である。 / 先に改革ありきの考え方よりも、今回明らかになった問題(大小様々だと思えますが)をできるところから少しずつ改善していくことで、結果として大きな改革となるという構図が有効だと思います。 / 他研究院、専攻の意見を積極的にとり入れる姿勢は立派だと思います。今後もこの全学FDを継続すれば、良い語学教育ができると信じます。 / 学生にmotivationを持たせるために、他言語ができる能力があるとどんなメリットがあるかを多数具体例で示し教える。 / 新たな改革案をいかに目標通り、実施するか。個々の教官が、学生の授業評価で指摘されるような点を早急に是正すべき。 / 大きな改革より、小さな改革の積み重ねないと、結局成果はあがらないと考える。 / 外国語教育担当と文学担当をはっきり分けるべきである。外国語教育担当者は第二言語教育法を身に付けたものがすべきである。 / とりあえず改革案でやってみて、問題があれば改善してはいかがでしょうか。 / 再履修クラスがどの程度効果を上げているかを適切に評価する。 / 学生のlevelに応じたクラス編成をする。 / 授業評価に関するアンケートは確実に回収し、現場にフィードバックする。 / 言文内での、また、高研センター、各学部との地道の話し合い。 / 大学院入試、就職活動、就職語の企業内活動、留学のいずれにおいても重要である。(国際標準のテストである)TOEFL又はTOEICを、学生評価と達成目標として、導入すべきであると考え。能力別クラスをぜひ導入していただきたい。 / 専任教官の増員が、独法化後必要ではないか。非常勤講師への依存が強すぎる。 / 教授会で十分対応して行く事が重要だと思います。 / 専攻の先生による授業見学。言文でのFDのとりくみ。 / 英語能力別クラス分けを行い、各クラスの能力に応じた教育を行う。成績評価は学生の能力向上度を重視する。 / 定期的にTOEFLやTOEICによる客観評価を行い、その結果を単位として評価する。また、クラス分けの再評価にも使える。これによりクラス間の不公平感も少なくできると思われる。以上のような通常クラスの改善により、再履修クラスは自然に不用になるとと思われる。 / 高校との授業内容の関連性の不断の調査、シラバスへの教育内容の具体的提示 / 性急に一方の方向に決めないこと。 / 今回のカリキュラム改定案は何か改革をしなければいけないと無理に改革している面があり、あまり深く考えて成されていないように思われます。もっとじっくりと考えてみられたらいかがでしょうか? / LL教材の充実。TOEFLとのリンク / 英語教育の中でもコミュニケーション能力に関する授業(例えば英会話)は、アウトソーシング(外部委託)しても良いのではないかと考える。 / 部内での外国語教育の理念、目標 / 方法等についての共通理解(今まであまりにも各自の自主性に任せすぎバラバラだった)他研究院とこれからFDなどで交流し相互理解を深める。 / 単位認定、厳正な成績評価についての内部討論を。

[未修科目分科会]

各学部と連携して、語学に対する学生のモチベーションを高め、必要とされる語学力を学生に提

示する。 / 異なる語学担当教官間での教官の情報交換を活発化する。 / ①未修外国語の基本的な（共通の）学習目標→到達目標を設定し、文書化して全教官に配付すべきである、②各外国語の到達目標を設定し、その目標に合わせて成績の共通評価をすべきである、③未修外国語、アジア系言語の有資格（出身国で教職についていた者）留学生に授業を担当させる方策を考えるべきである。 / 各学科で学生による授業評価アンケートを分析したうえ、授業内容を改善するように…（例）共通教科書を使用すること。 / この成果を多方面に通知、連絡し、関係のネットワークを樹立すること。 / 成績評価の平準化について、具体的な基準を設けて発表する。 / （要望）学部レベルでは、言語文化研究院の提案通り宜しいと思います。将来的には大学院の語学教育についても考えていただけませんか。大学院生に求められている語学のレベルと現実のレベルの差に困っております。 / 選択しうる外国語のみ直しor増加、そしてその選択方法をもっとフレキシブルにすることを考えてもよいのではないか。 / 履修方法の柔軟化 / 講義での修得目標の明確化と共通化 / 課題として考えられることに直接関連する質問内容のアンケートをして、教員の側の意識とのすり合わせ、照合が必要ではないか。 / ①共通シラバスの導入、②標準化の積極的導入 / 英語科に関しては標準の評価法を導入すべき。（TOEFL, TOEICなどの利用） / 言語文化研究院、所属研究院相互に共通の問題であるが、部門を分けるのではなく、お互いに出かけてゆく事も必要ではないだろうか。また、タイトなシステムを作るのではなく、各々のキャラクターを生かした講義、授業で良いのではないだろうか。 / FDの重要な点は、結果を今後の改善につなげる点である。この点が、今回は提示されなかった。主催者側の認識不足だと思う。成果を具体化させるための組織づくりが重要だと思う。 / 今回のFDだけでは十分でない。言文独自の自己点検 / 評価（学生アンケートを含む）が必要である。 / 未修科目の位置付けを再考すべきと思う。理系教官からのアンケート回答をもう少し重く受けとめる必要があるのではないか。

[日本語科目分科会]

（全学の対応：留学生のための日本語教育）○九大のアジア戦略の人的貢献、人材育成、輩出の観点から、留学生（特にアジア圏）の受け入れ拡大と良質の教育サービスに対応できる留学生センターの機能強化（人員、資金）、○異文化交流の場として、日本人学生を交えた授業、演習ゼミ（日本人のためにも）○チューター制度の拡充（10,000円/年1人ではボランティア）（言文の対応）○言語教育と文化を一体にした教育 / 能力別で上のクラスは1回で単位ありとする。下のクラスでは3回まで単位をとる必要ありとする。そうすると1種以上の学生は出席の必要はないので人数がへる。FDは組織体制 / 制度、マネジメントなしでカリキュラムのみ問うても実効がないと思う。 / 到達目標の明確化と成績評価の工夫（コメントを表示する小中学校の通知書形式） / 客観的な評価基準を確立し、改善を進めて行く。 / 学生に明確なガイドラインの提示。（何をもって到達（クラス目標）したとみなすか、九大の部局ではなにがどの程度必要か） / 話をきけばきくほど「日本語」の問題はたんに「日本語」の問題ではなく、もっと大きな問題であるので「留学生センター」の日本語教育の枠をこえた問題だと思った。 / （留学生センターの対応）分科会でも言われていましたが、個々の留学生についての様々な情報を各学部あるいは研究院と密接なコンタクトをとって、頻りに交換することが重要と思われれます。 / 留学生学部入試に関しては、語学能力の査定基準をもっと明確に各部局に対して、情報として提供する。

(所属研究院の対応)

[英語科目分科会]

学生のモチベーションを高めるための細かな情報提供 / 今行っている事（大学院入試におけるTOEIC, TOEFLスコアの導入及び技術英語の開講）を続けていく。 / 研究院では英語の論文を読む、書くことがとても必要ですので、Reading, Writing をおろそかにしないことを言文に伝えてほしい。特に英語の授業数は限られていますので、どの能力が必要か優先順位をつける必要があるかもしれません。 / 言語文化研究院と各研究院とのFD等、連絡を密にする。 / 多様な意見が出たので、

時間をかけた十分な吟味が必要。 / 英語5の報告のどおり、若い人が本当に英語が必要となるのは、大学院生になって論文投稿や国際学会出席のときである。このときにシステムティックに技術や知識を与える方策がないだろうか？ / 低年次で基礎（本来は大学入試までに獲得していると思われる英語力）をしっかりと教えていただいた上で、やはり、言語文化の先生方と密接に連携をとりながら、各学部で専門的な英語学習指導を行うべきだと考えます。 / 国際学会への参加を奨励、あるいは義務づけることで、英語習得の動機づけを学生に与える。 / 研究院に来た学生が、それまで受けてきた英語教育レベル（習得度）に留意し、いきなり高度な英論文を読ませない様、教育の連続性を意識する。 / 医学部学生の多くは一般臨床医になるので、必ずしも英語等の他言語を必要としなくなるのではあるが、必要とする人のレベルを高くするためには、皆に要求し、ボトムアップすることが大切と思われる。 / 専門科目で外書講読、科学英語があるが、これらの科目と言文科目との連携をいかに図っていくか。 / 歯学研究院では、外国語教育に対応できる教官はいない。 / 今回のような全学FDでの話し合いを通じて、各研究院で必要とされる英語能力とは何かを明確にし、英語カリキュラムに反映してもらう努力をする。 / 芸術工学研究院で開講予定の学術英語は研究院全体の教員による英語教育への参画となるので、それが全学教育の語学とどのような関係を築けるのか、全学的に注目して欲しいし、何らかの意見があると良いと思う。 / （他大学でも話が進んでいるが）TOEFLやTOEICを大学院入試での評価基準の一部として導入すべきであると考えます。 / できるだけ多くの英語の論文を読ませて専門用語になれさせる。 / 海外からの研究者の英語による講演を聴講させる。 / 言文の先生を研究室等にまねき、現状の外国語の必要性、学生の実態を知ってもらう。 / 研究院で必要とする英語レベル（内容）の提示 / 個々の学生に対し、語学学習の価値（①専門分野での深化、②キャリア / パスに於けるメリット、③語学を十分に学ばなかった場合のリスク認識等）について、教育を通じて理解させる必要。これにより、語学学習のmotivationを高めることが可能に。 / 外国からの客員研究員や招聘研究者を積極的に導入し、国際的な感覚を身につけさせる機会を増やす。今回のFDの論点とは違いますが、一つのアイデアです。 / 大学院入試にTOEFL、TOEICの導入（スコア提出+英語試験免除）を検討する。学部時代の英語のmotivationの1つになる。より実用的な英語をマスターした学生を大学院で受け入れることが可能となる。 / 院レベルへの英語指導（例えば学府所属の教官が全学授業をするのと逆に、英語の先生、native speakerがニーズのある院生へ指導してもらう。） / 専門分野に関する原書などのリーディング能力を高める対応策を考慮すべきと個人的に考えるに至った。

#### [未修科目分科会]

語学教育の継続性について、対応を考える必要がある。（専門外国語への展開を計るためにある程度のシステム構築） / 低年次の学部学生に対して、外国語の必要性（英語のみならず、第二外国語）も啓蒙する。 / 授業担当者間でのコミュニケーション、議論の機会を多く持つことが大切と思われる。 / 語学教育の実効があがるように協力したいと思います。 / 学部教官による語学教育への参加（留学生も含む） / 現状の履修についての認識を深める / 学部の要望を明確にする。 / 今回のFDで主として関連あるととれた「全学教育」としての外国語教育に関与していないため、所属研究院としての対応は今の所直ぐには出てこない状況である。 / ①全学の支援、②高学年になるにつれて衰え行く外国語能力対策。専門講義を英語で展開するなどの対応。 / 動機づけとして、国際学会等での英文発表、留学制度等を活用していく。

#### [日本語科目分科会]

上記質問2の回答で述べた②母国語から日本語へのマッピング能力の育成について、言語文化研究院・留学生センターと所属研究院と連携して対応できるようにしたい。 / 学部としては留学生入試や英語能力の判断をプレースメントテストのようにして出してもらって、それを学部の教務委や学生委に上げるようにした方がいい。学部の担任がもっと積極的に学生の能力やバランスや必要な能力の学習指導ができる体制と意識改革を考えていく。 / 専門科目（英語経済等）による言文科目 I

の代替が可能かどうかの検討 / 客観的な評価基準を確立し、改善を進めて行く。 / 今日聞いた問題点について、留セの視点での生産的な提案を公の場に長を通して行く。 / 留学生学部入試の査定時には留学生センターから積極的に情報を得るように努力する必要がある。可否の判定を総合的に行うために重要。

## その他の意見や感想等

### 〔英語科目分科会〕

学生が他言語能力を高める方法に関する案。①学生自身に十分な言語学習のmotivationがないと学生の他言語能力は充分にはあがらないと思われる。従って、学生にmotivationを持ってもらうようにすることを九州大学側が行わないと十分な対処が必要と思われる。他言語能力があれば、その人のこれから一生の人生において、どのようなメリットがあるかを具体的に教えるとよいと思う。

「留学生に必要（絶対）」、「英語論文書ける」、「ビジネスに重要で給料が違っている」、②新入学生は九州大学のような大きな大学に入ると、あらゆる面で全体像がつかめないうちに、時間がすぎてしまうと思われる。説明会の様なオリエンテーションも大切であろうが、「うまくきれいに編集されたCD」を作成して、九州大学の言語教育がいつどこでどのように行われているか等の全体的構造を学生がわかるようにすればいいと思われる。CDは100～200円で作成できるので、各人に配付してとにかく一度見せること。③効率的教育法を探してくる。世の中には多数ある。④教材が楽しくない。言語を習うのに文学は楽しくない。もっとおもしろいものを。 / 下請けをさせるのではなく、4年間を通じての外国語教育についての討論、外国語教育への積極的な参加を。

### 〔未修科目分科会〕

全学FDの開催趣旨が不明確である。昨年も今年もそうだが、それぞれのテーマについては趣旨は明快で、議論も可能だとは思いますが、そもそも全学FDを何のために、どのように行うのかという説明が全くなく、配付されている資料も「実施要領」とアンケート結果のみで、まるで入試の試験監督を行うようである。能力開発を旨とするFDが事務手続きの手順を示すのみの案内文書では本末転倒であろう。法人化して中期計画 / 目標に沿う形で教育 / 研究の到達度を絶えず修正すべきであるのに、法人化以前の段階で手順をこなすことのみしかなされないようでは形骸化のそしりをまぬがれないだろう。来年度からはFDの趣旨 / 目的を明確にし、内容のあるFDを企画してほしい。また各分科会における役割分担等、事前の準備も不十分であったと思う。FDで重要なことは、この結果をいかに改善していくかにある。その具体的な対応を主催者側にお願いしたい。

### 〔日本語科目分科会〕

（感想と希望）医学研究院では英語は是非必要であり、もっと充実してほしい。第2外国語は教養としてはよいかもしれないが、診療と研究の場では英語は必要欠くべからざるものであるため、国際社会でも英語が堪能であれば十分通用する。